

二言語併用者個人についての研究

— Weinreich の *Languages in Contact* とその後の研究 —

米 田 佐 紀 子

序 章

社会の国際化が進む中、二言語を操る日本人も増えてきている。その中で、「バイリンガル教育」「イメージングプログラム」「早期英語教育」といった風潮が強くなり、帰国子女等言語接触を経験する日本人も増えてきた。この二言語併用という問題は、当事者である個人をはじめとして、社会や文化にも大きな影響を与えている。

本論文ではこの問題の当事者である「個人」について焦点をあて、そこから個人を取り巻く諸要因を考察していく。考察していく上で、言語接触のバイブルともいわれる Weinreich (1966) の *Languages in contact* を中心とし、彼の業績以降解明されてきた事、未だ解明されずに残されている事を洗い出し、考察していく。

第一章 二言語併用の心理学的理論

Weinreich の *Languages in contact* は今から30年以上も前に書かれたものとは言え、彼の論点がいかに的を得たものであったかはその後の論文(ベーカー 1996、ラーセン=フリーマン&ロング1995)にも表れているように、一目瞭然と言えよう。

Weinreich は「二言語併用者個人」の章でまず様々な心理学者の研究に言及し、二言語併用者の心理を探っている。最初に彼は、連合心理学の研究者である I. Epstein^{註1}について触れている。彼によれば、思考とは、観念と単語との間の連合である。例えば、仮に、“ab” という連合が既に成立していると考えよう。この成立によって、次の“ac”の成立は抑制される。それでも“ac”という連合が成立すると今度は“a”と関連付けて“b”または“c”の再生が抑制される。ゆえに、どの単一概念も、二言語併用における複数の単語連合は、相互に干渉しあう事になり、書く・話すなどの表現的な用法において干渉の度合いが高くなるという説である。しかし、その後 Epstein の連合干渉の重要さは疑問を持たれているという。

次に幼児語の研究者である W. Stern^{註2}の考えを引き合いに出している。彼によれば、言語間の差異は干渉の連合現象を起こすだけでなく、他に、個々の思考という行為に対しても、比較や弁別に対しても、視野の認識と概念の限界に対しても、意味の細かな微妙なニュアンスの違いを理解する事に対しても、強力な刺激となるという。

言語心理学の1960年頃の動向として、code と message、すなわち、language と speech の区別によって、言語学及び通信理論の進歩として二言語併用についての心理的理論研究が認められるようになって

てきていた。これに加え、心理学だけでなく、脳医学の研究から、二言語併用者の内部に解剖学的にも言語の局在化現象があり、局在する制御中枢があるのではないかと Weinreich は見ている。彼 (Weinreich 1966:72) は、海馬の窪みの後縁と隣接する頭頂部分で言語切り替えが存在するという二言語併用についての部分的な神経学的理論の形成に触れ、解剖学的に局所化された制御中枢についての仮説が実証されれば言語混同の量について二言語併用者個人間の相違を説明できる日が来るかもしれないと予測している。

この疑問に答えられる時代がやってきつつあるのかもしれない。Uemura (AILA 99: 102) は、長年同時通訳に携わっているが、多言語使用においては、もし子供が母語を覚える時のように口頭で言語を覚えると、脳の左半球にあるウェルニッケと呼ばれる場所に、言語が言語毎に独立して登録されるが、読み書きといったいわゆる文法-翻訳方式で言語習得した場合には上記のようなものは出来上がらず、これを現代医学では神経学と神経言語学で示すことが出来ると述べている。医学と言語学の共同研究は、言語干渉研究の未解決な問題を躍進的に解明しつつあるようである。

第二章 二言語併用者の特性

二言語併用者には二つの特性があると Weinreich は述べている。適性と切り替え能力である。「特性」の中に、もっと多くの要素、たとえば、性格とか認知スタイルといったものを含む研究者 (ベーカー1996、ラーセン=フリーマン&ロング 1995) もいるが、ここでは Weinreich に沿って見ていく。

彼は、適性と切り替え能力を同じような条件下で、二言語併用者に見られる特異な干渉の型と、それらの干渉総量との間に相関があることを確認する必要があると述べている。以下、適性と切り替え能力について見ていく。

第1節 適性

これは、ある定義によれば、第二言語における個人の「振る舞い」における要因にほぼ等しい。これを測定するには第二言語における熟達度を用いるが、適性と熟達度についての相関は検定可能なもので、テストもあるが、実際にはその熟達度の点数は、干渉を記述するためには十分細かく類別化されておらず専門的研究が必要であると述べている。Weinreich 以降様々なテストが作られ使われてきている。様々なテストについては後で述べる。

次に Weinreich は二言語併用がいつ開始されるべきかという議論を行っている。学派によっては幼児期の二言語併用は言語学習能力に対して不利と言っているものの、Spoerl^{注3}の発見によれば、ある学派・学者の研究結果では単一言語話者より得点が高かったとか、Tiremann^{注4}による報告では、第二言語の語彙を学ぶ時に子どもの二言語併用者が持つハンデは時として考えられるほど大きいものではないなど不一致な点が多く、明確な答えが出ていない。実際、最近の第二言語習得理論でも未だに明確な答えが出ていないようである (ラーセン=フリーマン&ロング:1995、ベーカー:1996)

最後に、二言語併用は第三言語の習得の際、自分の経験が有利に働くという説があることを紹介しているが、これも理論的裏付けに乏しいと述べている (Weinreich 1966: 73)。

第2節 切り替え機能

理想的な二言語併用者は、一つの言語から別の言語へと言語状況(場面や対話者)に応じて適切に切り替えることができ、言語を混用しないことができる人である。通常、言語の状況が変わらない場合、また、一つの文の中で切り替えると言う事はしないものである。一つの状況の中で言語が切り替えられる例を挙げよう。米国の大学院の社会言語学の授業でスペイン語と英語を話す二言語併用者が紹介したケースであるが、カリフォルニア州のスペイン語と英語の二言語併用集団では、通訳のいないカトリック教会のミサで、場面に応じて英語を使用したりスペイン語を使用したりするという例がこれにあたる。

Weinreich によれば切り替え機能については個人差がかなりあるという。これについて、理論的には、二つのタイプがあると彼は述べている (Weinreich 1966: 73-74)。(1)一つの言語に固執するタイプ。(2)一つの言語状況において二言語を混用するタイプ。(1)のタイプについては単一言語話者とのコミュニケーションにおいて問題を生じるとは考えられない。(1)のタイプに関する例として、日本人と英語話者との間に生まれた日本在住の子供たちの中には、小学校就学後に「外国人」というレッテルを貼られるのがいやで、英語で話しかけられても日本語で返答するという傾向(*passive bilingual* と呼ぶ)が見られるという研究発表もあり、社会的・心理的要因がこれには関係していることを示している (Yamamoto, 1999)。(2)の切り替えを多く行うという例については、特に異常なほど頻繁な切り替えをする個人の場合、かなり幼少の時に母親や父親というような親しい同一人物によって、区別なく両方の言語で話し掛けられた人に見られるという (Weinreich 1966: 74)。

次に、Weinreich は、「ある一定の首尾一貫した状況で言語の埋め込みを行う事は、言語を混ぜない形での言語学習を容易にする」という Stern^{註5} に言及している。ここから考えると、混乱なく二言語併用者に育てるには、対話者と使用言語が一定している必要があるということになる。

コード切り替えについて、ベーカー (1996:99) は目的があって行われると述べている。たとえば、(1) 強調のため、(2) ある語彙を両方の言語で知らないため、(3) 表現の簡潔さと効率性のため、(4) 明らかにするための繰り返し、(5) 集団のアイデンティティと地位を示すため、集団として受け入れられるため、(6) 誰かの言葉を引用するため、(7) 会話の途中で言葉を挟むため、(8) 会話の話題から誰かを排除するため、(9) 社会的民族的境界を超えるため、(10) 会話での緊張を和らげるため、という目的によるという。彼によれば、二言語の混用は「自然なバイリンガルの発達段階」と述べ、二つの言語を話す両親に育てられた子供が混用する場合においては時間が経つにつれて言語間の分離が出来ていくと述べている。また、ベーカーは Fantini^{註6} を引用して、固定した概念である「干渉」よりも、子供の2言語間の区別を転移として段階的な発展の過程と捉えることも出来ると述べている。しかし、Weinreich の意見と同様、混用を起さないため、また、効率のよい方法としては「一人一言語」や「一コンテクスト一言語」という原則が良いと述べている。

第三章 二言語併用者個人の中での言語の相関的地位

干渉研究を取り巻く様々な要因の中で大切なものの一つは、どちらの言語がソース「原語」または

モデル「原形語」になっているか、どちらの言語が受容語あるいは複写語か、また、どんな状況において一つの言語が両方になり得るかということであると Weinreich は述べている (1966: 74-75)。つまり、言語そのものが個人がおかれる様々な状況によって変化する。この点から Weinreich は「心理言語学」的基準が必要であると述べている。

言語干渉の特徴は接触の場面によって、干渉のタイプの傾向と範囲が変化する。しかし、言語そのものは同じなのだから、接触と干渉の行為者である二言語併用者個人との相関地位が変化するのであると考えられる。この観点からすると、複数の同じ言語を知り、同じ適性と切り替え機能を持つ2人の二言語併用者がいたとしても、それぞれの言語に対する彼らの立場は異なるであろうから、二言語併用者の立場が二つの言語に照らし合わせてどのようなものであるかを問う事が必要となる。そのためには、どちらの言語が優位であるかと言う事を示す基準を設定しなくてはならない。その基準として、Weinreich は次の項目を挙げている。(1) 熟達度、(2) 習得の順序、(3) 態度である。これらすべてが検討に加えられなければならない。これらの基準のそれぞれが干渉の典型的な形式とどのように関わるのかを検討する必要がある。この検討があつて初めて優位性基準と相互の関係が二言語併用者の言語態度と比較され得るのである。

第1節 相対的熟達度

すでに第二章第1節の「適性」において述べられているように、適性の測定は熟達度によって表わされる。二言語における二言語併用者の相対的熟達度はいくつかのテストによって計測でき (Weinreich 1966: 63の脚注において Malherbe^{註7}、Taute^{註8}等の測定方法が紹介されている)、二言語のうちどちらか一つが話者の熟達度の優れた言語によって優位とみなされる。Weinreich は相対的熟達度は以下の3つの基準で測定されるべきであると述べている。

- (1) 第一に、言語の規範的基準からではなく「標準」的形式記述から公正になされた現実的な基準に照らしてテストされねばならない。
- (2) 熟達度は様々なレベルごとに別々に測定されるべきである：理解、表現、内語(通常のテストは3つすべてを一度にカバーすることが多い)。
- (3) 相対的熟達度は、二言語併用者の生活のある一時点で測定されるべきものである。なぜなら、比率は時間の流れとともに変わるからである。

この熟達度の測定について、ここではベーカー (1996) とラーセン=フリーマン&ロング (1995) に詳しく出ているのでそれについて述べていく。

まず、ベーカー (1996: 29-49) は、目的によって測定方法が異なるという観点から以下の測定法を紹介している。たとえば、二言語併用の国 (カナダやアイルランドなど) における分布を調べる国勢調査や学校などでの選別のためのテストなどである。ここでは①言語背景尺度、②熟達度を調べるための評価、③言語のバランスの測定という3つの観点から測定法について述べていく。

- ①言語背景尺度：誰と話すとき、あるいはどのような状況でどちらの言語をどれだけ使用するかを自己評価する。

②熟達度を調べるための自己評価：家で自分は何語を話すか、家の外ではどうか、その時どの程度その言語が話せると思うかを自己評価する。

③言語のバランスの測定：

- (1) 語連想の課題における反応の速度を測る：刺激語に対する連想語をどちらの言語で素早く言えるかを計る。たとえば、「家」という刺激語に対して、「窓」と答えるという具合である。この場合、一方の言語の使用が多かった場合、そちらの言語が優位である事になる。
- (2) 語連想の課題における反応語の量を測る：刺激語（例：家）が提示されたときに、一定の時間内に何個連想語が言えるかを測定する。
- (3) 両言語を使って語を探すのにかかる時間や量を測る：この場合、両言語の表記法が同一でなければならないが、無意味つづりから両言語の単語を見つけ出すという作業をさせて測定する方法である。方法には二つあり、一つは一組の単語を解答者が両方の言語で読む時間を測るもの。もう一つは、借用（干渉）や言語切り替えなど二言語混用の量を測るもの。
- (4) 実際のコミュニケーションを重視した言語テスト：これには面接法と日常の生活を観察する事の二つがある。後者は、一日中ついて回らねばならず、なおかつプライバシーの問題もあり実施が難しい。前者はよく取られている形式だが、面接官の問題や、聞かれる問題の内容が適切か否かという問題がある。ベーカー(1996: 41-42)はコミュニカティブ・アプローチという言語理論に基づく言語テストを紹介している。これは、各レベルに言語目標（例：5歳くらいで、グループ活動の中で話し手・聞き手として参加できるか）と評価タスク（例：ごっこ遊びで客を演じなさい）があり、子ども達を観察し、記録するという方法を紹介している。
- (5) Bachman^{註9}のテスト：言語能力と言語運用の両方を考察しているもの。（ベーカーでは考え方は紹介しているものの具体的な例は挙げていない。）

まず①は「誰と」あるいは「何処で」ということしか分からず、めったに会わない人や行かない所が含まれていた場合、実際の使用時間や量が正確につかめないという欠点がある。②は「かなりできる」「あまりできない」という表現で自己能力を表現しても、実際はできる人が「できない」と答える可能性もあり、信憑性に乏しい。以下③の(1)-(3)については言語能力の一部は見られるかもしれないが、実際の使用や熟達度を調べてはいない。(4)と(5)はそれを補うべく実際のコミュニケーションの場での言語使用能力を測ろうとするものである。

次に、ラーセン=フリーマン&ロング(1995:27-39)は、データ抽出という点で多くの方法を紹介しているが、ここではいくつか主立ったものを挙げていく。

- (1) 音読法：L2の音声習得を研究するために使用されるもの。被験者は特定音声を含む語彙、文章、パッセージなどを音読し、それをテープに録音する。

- (2) 統制規則操作法：被験者の言語活動を研究するために、特定の形態素あるいは統語構造などを使用させる。タスクとしては、変換、空所補充、文書き換え、文結合、多肢選択などがある。
- (3) 文完成法：被験者がある文の出だしの部分を読んだり、聞いたりして、後半は自分の言葉でその文を完成させる。ここで Bialystok^{注10}、Fathman^{注11}等を紹介している。
- (4) 模倣テスト：被験者は研究対象の構造等を含むいくつかの文を聞き、同じ文を模倣するよう求められる。
- (5) 翻訳：被験者は母語で書かれた文章をL2に翻訳したり、また逆にL2の文章を母語に翻訳したりする。
- (6) 誘導作文：被験者はある言語表現（刺激）について口頭か書き言葉で表出することを求められる。
- (7) ヒントつき質疑応答：絵を見せられた被験者は研究の対象の言語構造の抽出を意図した質問に答えるよう指示される。
- (8) 物語再構築法：被験者は聞いた物語の筋を再構築するよう指示される。
- (9) コミュニケーション・ゲーム：L1話者とL2話者をペアにして課題を出し、課題に取り組んでいる間の会話を録音し、分析する。
- (10) ロール・プレイ：被験者は研究者と一緒にロール・プレイに参加するよう求められる。この方法によって語用能力の多くの側面が明らかにされると考えられる。
- (11) 面接法：被験者は研究対象の構造を積極的に表出するよう、面接において研究者が主導権を握って話題をコントロールする。
- (12) 自由作文法：ある話題について自由に被験者が表出するもので、最も制約が少ない。

以上が Weinreich 以降使われてきた測定方法の一部である。どれも二言語併用の一部は測定できても全部を測定する事はできない。また、信憑性という点でも、使用に当たっては注意が必要であろう。また、言語習得の過程では「退行」、あるいは「後退」といった現象が見られるので一回の測定結果だけで判定することは誤った考察を生み出すことにもつながる。ある言語パタンの習得時点の定義ということについて、「義務的文脈において、文法形態素が、2週間にわたり、3回連続して90%以上正しく補充された最初の発話サンプルである。」と Cazden^{注12}が述べているのをラーセン=フリーマン&ロング（1995：42）は引用して測定と考察のしかたについて注意を促している。また、以上に引用したものが必ずしも二言語併用者について考案された抽出方法とは限らない事を念頭に置く必要もある。研究者は二言語併用者のどの部分を研究したいのか、測定によって何が測れるのかということを確認にする必要がある。

第2節 使用の様態

二言語併用者にとって、読み書きが出来る言語の方が口語のみの言語より優位になるという。二言語併用者は読み書きによって言語使用の視覚的補強を得る事が出来る。読み書きによる言語使用

の視覚的補強を得る事によって読み書きできる言語は、単に話し言葉のみの言語よりも優位になる。この視覚的補助は言語習得を強化するという一般的に受け入れられた考えがあり、Minkowski^{注13}の二つの事例によって裏付けされているという (Weinreich 1966: 76)。この Minkowski のケースでは、失語症から回復した二言語併用者が書き言葉で使用した標準ドイツ語とフランス語を母語のシュヴァイツァトウチュ語の前に取り戻したという。

使用の様態についての最近の調査については第三章第1節①のようなものが挙げられるが、客観的なデータではなく、信憑性が低い。

第3節 学習順序と年齢

これは言語習得理論に大きく関わる問題である。通常、最初に習った言語の影響はとても大きく、第一言語つまり母語は優位であると定義付けられる。二言語併用の初期の段階では、母語が熟達度の高い言語となる。実際、熟達度だけでなく、発音にも違いが出てくるようである。例えば、acoustic phonetics では、/skaɪ/ “sky” の/k/が[g]に聞こえるという実験をした場合、最初から英語にしか触れていないインフォーマントと途中から英語話者になった(移民の子供など生後から就学まで家庭で母語を話し、就学時から英語に変わった場合など)インフォーマントでは、前者と後者との間の実験結果に差異がでるといふ。しかし、この差は耳では聞き取れないものである。多くの二言語併用者はある環境のもとでは第二言語の方が優位となり、時にはそれが母語にとって代わる。アメリカの移民が彼らの母語より英語の方が楽に使えるようになることなどがその例である。

言語能力とは別に、言語には「感情」や「思い入れ」といったものも存在する。Weinreich は話者の母語に対する感情的な関わりが、完全に他の言語に転移する事はめったになく、その例として、二言語併用者で失語症にかかったものが、母語を先に取り戻したというケースでは、母語に対する感情のゆえであるという説明をしている (Weinreich 1966: 76-77)。

第二言語を習得するには年齢の要因が大きいとする「臨界期」の存在を主張する説^{注14}もあるが、その一方、年齢ではなくその他の要因が大きいとする説もある (ベーカー1996: 96)。

「10歳くらいまでは二言語併用教育をしない方がいい」、「高校や大学レベルに外国語教育が集中していることやバイリンガルの地域で小学校の早い段階では第二言語の学習をバイリンガル教育でしないのは言語習得の適時性があるという考え方が一般的である事を示している。」「10から11歳くらいが適当である。と言う意見が一般的である」という言い方で、Weinreich (1966: 76) は二言語併用教育を早期に行う事に対して反対しているものの、様々な年齢で第二言語に子どもをさらすことの効果については正しく行われた事がないとも述べている。

上記と並行して国際結婚など二言語使用の環境にある子供たちもいる。彼らをはじめから二つの言語を学び始める。これらの子供について Weinreich は彼らには母語が二つあると言う事になると述べている。これらの二言語併用赤ちゃんは単一言語話者と比べて別の研究課題を提供している。たとえば、何歳から二つ学んでいる事に気づくのかといったような事である。これに対し、Weinreich は、ある人は3歳まで気づかないと言い、別の観察者は早い子供で1歳6ヶ月で、その子供が完全

に2言語習得に気づいたのは3歳という (Weinreich 1966: 77)。しかし、自分の二言語使用に早く又は遅く気づくと言う事が干渉に照らし合わせて、その個人自身のその後の行動とどのような関係があるのかは今後の研究課題として残されているとして結論が出ていない。

第4節 コミュニケーションにおける有用性

二言語併用者にとって二言語が使用できることはどのような意味を持つのであろうか。Weinreich は、イギリスのウェールズ (二言語使用地域) とスイスでの研究は9割の生徒が他言語を知っていることが彼らにとって有用だと示している述べている (1966: 77)。ここでは、言語接触が実際にあることが別の言語を学ぶ第一の理由であるばかりでなく、利用範囲が広いという事も干渉の原因となっているという (Weinreich 1966: 77)。

第5節 感情的関わり

人間は自分の幼少期に使用した言語 (通常母語) に対して強い愛着を持つ。幼少期での言語を含めた環境は言語をマスターする基礎となるものを作る。通常、後から学ぶ言語がその基礎的な言語と同等のレベルに達することはない。そして、自分の母語の方がもう一方の言語より豊かで、微妙で表現力豊かに自己表現できる。

しかしその一方、人によっては、後の生活 (たとえば、恋愛、友情、新しい国への愛国心等) における感情的関わりが衝突またはより強い絆を生み出すことも見逃せない。というのも、二言語併用者の失語症患者は、時として母語でなく感情的な関わりを長く持った言語の方を回復することがあるという事例が紹介されているからである (Weinreich 1966: 78)。

上記の相反する例を見ていくと、二言語併用者は感情的関わりという土台の上に立って優勢言語と位置づけるのであって、必ずしも母語が優性となるわけではないことが分かる。

第6節 社会的地位の向上における機能

社会のなかで仕事をしていく中で、言語をマスターしておくことは単にコミュニケーションの手段としてだけでなく、社会的出世の手段としても重要なことである。この時に求められる言語に対する知識は通常かなり高いものであり、第二言語がコミュニケーションの手段であり、なおかつ第一言語のレベルより低かった時には、二言語併用者は干渉の形跡を残さないための努力をしなければならない。この例として Weinreich (1966: 78-79) は Bossard^{注15}の研究である、アメリカの二言語併用者の例を挙げている。それによれば、言語干渉を起こすアメリカの二言語併用者は、自衛的方策の一つとして「不必要なまでに気を配る英語」を使うという。ここから考えると、どのようなタイプの干渉についてもかなり否定的な反応があることが予想される。

「社会的立身出世における言語の価値は”PRESTIGE”と名づけられるかもしれない」と Weinreich (1966: 79) は述べ、優位性についての他のどんな基準にも増して、この事は社会的に決定づけられるものであると結論づけている。一言でまとめると、出世のためには、環境ごとに優位な言語が

あり、その場合、他の言語からの言語干渉はマイナスになるということである。

第7節 文学的—文化的価値

どちらの言語が二言語併用者にとって優位な言語であるかを定めるもう一つの要因は、その言語で表される文学的—文化的価値について二言語併用者が抱く知的または美的評価であると Weinreich は述べている (1966: 79)。その理由として、文明が高い国は、高度な教育制度を持ち、その結果高い文化を誇っている。例えば、ドイツ系スイス人の二言語併用者にとっては、標準ドイツ語はシュバイツァトチュ語より、熟達度・感情的関わり・利用価値は低いにもかかわらず、文学—文化的な評価を考えた場合、ドイツ語が優位な言語となっているという (Weinreich 1966: 79)。

実際、言語は人間個人のアイデンティティと深い関わりを持ち、使用する言語がその人の文化的背景をも示す。それゆえに日本国内でも場面に応じて方言と標準語を使い分ける人も多く、この例もドイツ語とシュバイツァトチュ語の例と重なり合うところが大きいと考える。

第8節 優位性についての配置表

これまでの論議によって、Weinreich (1966) は二言語併用者にとって二つの言語のうちどちらが優位かを定めるそれぞれの要因によって、要因の多様性を明らかにしようとしてきた。上記の議論で分かるようにこれらの要因は同じ基準で測ることのできないものである。そこで Weinreich は、二言語併用者個人にとっての優性言語は、その言語が評価される基礎となる特徴の相対的配置としてのみ解釈されうると考えた。

そこでこの節では、Weinreich は二言語併用者個人の諸要因が何でそれらがどのようにに関わりあうのかを明らかにするため表1のような「相対的配置表」を作成した。この表によって、視覚的に二言語併用者の特徴を捉える事ができる。まずは表を見てみよう。

表1 二言語併用者個人をめぐる相対的配置表 (Weinreich 1966: 80)

	ADULT U. S. IMMIGRANT, SEMI-LITERATE		ADULT U. S. IMMIGRANT, CULTURED		CHILD IMMIGRANT (U. S.)		GERMAN SWISS		FRENCH SWISS	
	Native	English	Native	English	Native	English	Schwyz-erdtütsch	Std. German	Patois	Std. French
Relative Proficiency...	+		+			+	+		+	
Mode of Use (Visual)...		+	+	+		+		+		+
First Learning.....	+		+		+		+		+	
Emotional Involvement.....	+		+		+	+	+		+	+
Usefulness in Communication.....		+		+		+	+			+
Function in Social Advance.....		+		+		+				+
Literary-Cultural Value.....		+	+	+		+		+		+

米 田 佐 紀 子

この表で分かるように要因は多様である。しかも、彼はもっと多くのバリエーションが考えられるともべている。この表について分析していこう。

Weinreich が項目に挙げた人々は「アメリカ移民で半文盲」「アメリカ移民で教育を受けたもの」「アメリカ移民の子供」「ドイツ系スイス人」「フランス系スイス人」である。これらの人々について、「相対的熟達度」「使用の様態」「最初に学んだ言語」「感情的関わり」「コミュニケーションにおける有用性」「社会的出世における機能」「文学的—文化的価値」という観点から見ている。

アメリカ移民についてみた場合、半文盲、教育を受けたもののどちらも大人は母語の熟達度が高いが、読み書きといった視覚的な使用形態は半文盲の人々にはない。この事は彼らにとって視覚的な補助は母語について得られない事を示している。一方母語でも英語でも教育を受けた大人の移民は両方の言語において視覚的な補助がある事が分かる。移民の子供たちは最初は母語で育つが、言語の熟達度や視覚的使用形態という点では英語が勝っている。言語に対する感情的関わりは移民全てが母語に強い親しみを感じている点で一致するが、移民の子供たちは同じ親しみを英語にも感じている点で大人達と異なる。「コミュニケーションにおける有用性」「社会的出世における機能」「文学的—文化的価値」においては三者とも英語が優位であるが、母語で教育を受けた大人達は母語においても「文学的—文化的価値」を感じている。

一方スイス人についてみてみよう。ドイツ系スイス人もフランス系スイス人も、最初に学んだ母語の方が熟達度は高いが、読み書きになると標準ドイツ語や標準フランス語が優位になっている。

「コミュニケーションにおける有用性」という点では、ドイツ系スイス人にとっては母語が有用であり、フランス系スイス人にとっては標準フランス語が有用である。「社会的出世における機能」についてはドイツ系スイス人についての表記がない。これについては意図的に表記しなかったのか否かは不明である。「文学的—文化的価値」については本文でも表記があったようにドイツ語・フランス語が優位となっている。

表1によって「典型的」な二言語併用者が浮かび上がったとしても個人差については把握できないという批判もあるだろう。個人差を把握するためにはそれぞれの要因を関係づけ、言語運用とその人の生活史を別々に検討する必要があるが、諸要因を共有するような人を複数集める事は絶望的であろうし、今度はすべての要因を分離するために、一つの接触場面における人々を複数探すことも不可能であろう。最も実際的な研究方法としては、最大公約数的な要因を選び、検討する事によって、干渉のタイプと優位性要因群とを関連づける以外になく、このことについて反論する人はほとんどいないだろう。

この表によってそれまで偶然に見えていたもの、あるいは矛盾していると思われていた多くの言語現象を説明できる (Weinreich 1966: 80)。また、二言語併用者の適切かつ広範囲な研究が言語干渉における心理的要因の解明と社会—文化的決定要因が二言語併用者個人にどのような影響を与えるかを理解するための必要条件でもある (Weinreich 1966: 80)。

第四章 言語運用の場面と干渉

本章では、二言語併用者は言語運用場面の状況に応じて様々な干渉現象を示す。そのような干渉が見られる三つの状況について論じていく。

第1節 会話者の二言語併用性

二言語併用者は対話者によって言語を切り替えることが社会的に必要である。対話者が単一言語話者であった時には、彼の言語運用における干渉を制限し、習慣化している借用語を排除する必要がある。つまり、この場はいわゆる「会話制限」に支配されているということになる。この制限とは単一言語話者にその人の言語で分かってもらわねばならないので、二言語併用者は「通じる事」に重きを置く必要がある。この場合、第三章で述べたような社会的出世や感情といったものにも気を配らなければならない。相手が干渉を否定的に捉える可能性があるからである。

これに対し、対話者が二言語併用者であった場合は言語干渉に関する制限はほとんどなく、使用言語も一つの言語から他の言語に自由に移せる。ゆえに単一言語話者との会話より二言語併用者同士の方が広範囲な干渉を示すのも不思議ではない(Weinreich 1966: 81)。

第2節 言語の特別用法からの離脱

多くの二言語併用者は場面に応じて言語を使い分ける事になれている。その一方突然言語を切り替える事は言語干渉を引き起こす事にもなる。その例として、家庭と学校での言語が異なる場合が挙げられる。学校で学んだ学科目について家庭での言語で話をする事が難しくなり、話そうと努力すると言語が混ざりがちにならざるを得ないだろう。これは、筆者がアメリカで会った日本人の子供たちにも良く見られた。「冬眠」という言葉を家庭では使った事がなかった子供たちは「お母さん、熊って hibernate するんだよね。」と言ったとその母親が言っていた。また、この事はシュバイツァトチュ語と標準ドイツ語が使われているドイツ系スイス人の日常的な問題であるともいう(Weinreich 1966: 81)。Weinreichはこの他にも、場と話題が対立する事がある例を示し、たとえば、技術者が適当なシュバイツァトチュ語の専門用語がない「機械」について打ち解けた場面で話す時、または、シュバイツァトチュ語では簡単に言える家庭的な話題について、標準ドイツ語を必要とする公式スピーチで話す時などは、よく干渉が見られるという例を挙げている。望ましい二言語併用者は場面や対話者に応じて言語を使い分けるが、場面と話題、対話者と話題の間に対立が生じると干渉が起こる。

上記のような場合以外でも二言語併用者の中には、特定の人と一言語という形で話す事に慣れている人は、他の言語への切り替えが難しくなる人もいるという。この場合も結果として言語干渉が増える事になる。

研究者(Geissler^{註16}, Michel^{註17}, Barker^{註18})によっては言語の使い分けが出来かできないかによって様式化バイリンガリズム・非様式化バイリンガリズムを決める方法もあるが問題が残ると述べている(Weinreich 1966:81-82)。

第3節 感情的ストレス

二言語併用者が二言語扱うという事に伴う言語干渉の問題と感情的ストレスの間には相関関係が存在する事が提案されているものの、これは複雑な心理学的問題であり、これが存在するという事については触れるだけにとどまっている。実際に見られる現象としては、「情緒的」文法範疇と語と呼ばれ比較的頻繁に見られる転移によって提案されているという (Weinreich 1966:82)。また、借用語の多くの中には構造的な説明や文化的制度などの理由から説明をしてもまだ「感情的借用」と呼ばれる語が残るといふ。Weinreich はこれらを学際学的な重要な仕事であると述べている。

結 論

本論では二言語併用者に焦点をあてて特性 (適性・切り替え)・言語の相関的地位 (相対的熟達度・優性順位・学習順序と年齢・コミュニケーションにおける有用性・感情的関わり・社会的出世における機能・文学的・文化的価値・優位性の配置表・言語運用の場面と干渉 (会話者の二言語併用性・言語の特別用法からの離脱・感情的ストレス) についてみてきた。「個人」というバラバラな存在に、上記のような観点を持って切り込みを入れ研究として体系化していく事の難しさを明らかにしている。

どの分野も大脳生理学や心理学との学際学的分野とまたがり、今後も研究の余地があるとは言え、二言語併用者をめぐる特徴・環境についての方向性が示されている。つまり、二言語併用者は場・人・話題によって言語を使い分ける事が出来ること、また切り替えるべきであること、社会的な場面で仕事をしていこうとするなら干渉を押さえる必要があること、言語を選択する時には二言語併用者個人または社会の文学的・文化的価値が優性順位に影響を及ぼすことなどが指摘されている。学習順序と年齢についても10歳前後からの開始という事が述べられており、早期英語教育が叫ばれている日本の状況と比較すると興味深い洞察が得られるのではないだろうか。

本論文では、言語干渉 (あるいは転移) の資料抽出の大切さと難しさが明らかになった。今後、明確な目的と妥当な方法による資料の抽出と研究を進めていきたいと考えている。

謝 辞

本論文作成に当り岡崎金沢大学教授にご指導をいただいた事について感謝を申し上げます。

注

- 注¹ Epstein, Izhac. 1915. La pensée et la polyglossie. Paris. (From Weinreich 1966: 71)
- 注² Stern, William. 1919. Die Erlernung und Beherrschung fremder Sprachen, *Zeitschrift für pädagogische Psychologie* 20. 104-8. (From Weinreich 1966: 71-72)
- 注³ Spoerl, Dorothy Tilden. 1944. The Academic and Verbal Adjustment of College Age Bilingual Students, *Journal of Genetic Psychology* 64. 139-57. (From Weinreich 1966: 73)
- 注⁴ Tireman, Lloyd S. 1948. *Spanish Vocabulary of Four Native Spanish Speaking Pre-I-Grade Children (=University of New Mexico Publications in Education 2)*, Albuquerque, N. M. (From Weinreich 1966: 73)

- 注5 Stern, William. 1923. Über Zweisprachigkeit in der frühen Kindheit, *Zeitschrift für angewandte Psychologie* 30. 168-72. (From Weinreich 1966: 74)
- 注6 Fantini, A. 1985. *Language Acquisition of a Bilingual Child; A Sociolinguistic Perspective*. San Diego: College Hill Press. (from ベーカー1996: 99)
- 注7 Malherbe, Ernest Gideon. 1934. *The Bilingual School; a Study of Bilingualism in South Africa*, Johannesburg (1943. Afrikaans Edition, Capetown.) (from Weinreich 1966: 63)
- 注8 Taute, Ben. 1948. *Die bepaling van die mondelinge beheer van skoolkinders vor die tweede taal en van die korrelasies tussen hierdie beheer en sekere bekwaamhede faktore; 'n voorlopige ondersoek (=Annale van die Universiteit van Stellenbosch XXIV/B, 1)*, Capetown. (from Weinreich 1966: 63)
- 注9 Bachman, L. F. 1990. *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press. (from ベーカー1996: 43-44)
- 注10 Bialystok, E. 1982. On the relationship between knowing and using linguistic forms. *Applied Linguistics* 3(3): 181-206. (from ラーセン=フリーマン&ロング1995: 28)
- 注11 Fathman, A. 1975. Language Background, age and the order of acquisition of English structures. In Burt, M. and Dulay, H (eds.) *On TESOL '75*. TESOL, Washington, D. C. (from ラーセン=フリーマン&ロング1995: 28)
- 注12 Cazden, C. 1968. The Acquisition of Noun and Verb Inflections. *Child Development* 39:433-48. p. 137. (from ラーセン=フリーマン&ロング1995: 42)
- 注13 Minkowski, Mieczyslaw. 1927. Klinischer Beitrag zur Aphasie bei Polyglotten, speziell im Hinblick aufs Schweizerdeutsche, *Archives suisses de neurologie et de psychiatrie* 21. 43-72. (From Weinreich 1966: 76)
- 注14 レネバーグの説で、人間の言語能力を生物学的な視点から考察したもの。多くの生物の種において、成長の途上で一定の期間だけ、特定の場面や刺激にさらされるとその種に固有な行動が形成される。人間の言語習得においても生後数ヶ月から14~15歳くらいまでと想定される。(亀井、河野、千野 1996: 132)
- 注15 Bossard, James H. S. 1945. The Bilingual Individual as a Person—Linguistic Identification With Status, *American Sociological Review* 10. 699-709. (from Weinreich 1966: 78-79)
- 注16 Geissler, Heinrich. 1938. *Zweisprachigkeit deutscher Kinder im Ausland*. Stuttgart. (From Weinreich 1966: 81-82)
- 注17 Michel, Louis. 1939. Réalités psycho-sociales et degrés du bilinguisme, in International Congress of Linguists, 5th: *Réponses au questionnaire*, Brugge. (From Weinreich 1966: 81-82)
- 注18 Barker, George C. 1947. Social Functions of Language in a Mexican-American Community, *Acta Americana* 5. 185-202. (From Weinreich 1966:81-82)

参考文献

- Uemura, Ken-ichi. 1999. *Applied Linguistics: Today and Tomorrow*. The 12th World Congress of Applied Linguistics Abstracts. p. 102.
- Yamamoto, Masayo. 1999. *Bilingualism in the Japanese Context*. Symposium conducted at the 12th World Congress of Applied Linguistics, Tokyo, Japan.
- Weinreich, Uriel. 1966. *Languages in Contact*. London: Mouton & Co.
- 亀井 孝、河野 六郎、千野 栄一編著 「言語学大辞典」第6巻 三省堂 1996年
- ベーカー, C. 著、岡 秀夫訳・編 「バイリンガル教育と第二言語習得」 大修館書店 1996年
- ラーセン=フリーマン, D.、ロング, M. 著、牧野 高吉、萬谷 隆一、大場 浩正訳
「第二言語習得への招待」 鷹書房弓プレス 1995年